

日本語の留守番電話の談話分析

岡本 能里子

要 旨

留守番電話にメッセージを入れるという行為は、日常的なできごとになってきたにもかかわらず、苦手だという人が多い。本論文では、まず、留守番電話の場面的特性を電話と手紙との比較から検討した。そして、自宅の留守番電話に残された友人からのメッセージを分析し、留守番電話のもつ場面的独自性がいかにメッセージに反映しているかを調べた。留守番電話は、手紙と電話の双方の場面的特性を併せ持っており、メッセージの時間制限のある産出過程(process)によって完成度の高い産出結果(product)を形成しなければならない。そのような場面的要請に応えるために現れる、言語形態が親しい間柄に対する音声による話し言葉にそぐわない書き言葉的な言語形態になってしまい、2人の親しい間柄にへだたりを産む恐れがある。それを産出過程において音声的に調整していることがわかった。

[キーワード] 留守番電話 産出過程(process) 産出結果(product)
書き言葉 話し言葉

1. はじめに

留守番電話が我々のコミュニケーションのための道具として登場してから、まだ日が浅い。しかし、情報化社会の急速な変化の中において、留守番電話にメッセージを入れるという行為は、かなり日常的なできごとになってきている。しかし、留守番電話はどうも苦手な人が若い世代でさえ多いようで、¹⁾ 向後(1993)の調査では、メッセージを入れない人が平均37%、荻野(1994)の調査によると無言のまま切れているものが3～8割あるという。手紙の代替物として電話が登場した時のように、留守番電話という新しいメディアの機能は我々に新たなコミュニケーション能力を要求しているようである。そこで、本稿では、まず、先行研究を概観した後、電話と手紙と留守番電話の場面的特性を比較し、留守番電話の場面的独自性を検討する。その上で、自宅の留守番電話に残されたメッセージを分析し、その言語形態的特徴、および音声的特徴を明らかにしたい。

2. 先行研究

パソコン通信をはじめとするメディアを介したコミュニケーションの研究がさかんになる中、留守番電話の研究も少しずつ見られるようになってきており、これまで、主に留守番電話にメッセージを残すことになぜ困難を感じるのかといった心理的社会的な面に焦点があてられてきた。(向後 前掲 荻野 1993, 1994) しかし、かけ手のメッセージ(以下「メッセージ」と記す)の詳しい分析は、まだないと言ってよい。²⁾ 一方、英語の研究で、Gold(1991)は、留守番電話の談話構造を抽出し「メッセージ」に電話会話と手紙の文章の言語的特徴、および1対1の対話と、1対多のスピーチのようなスタイルが混在していることを指摘している。Dingwall(1992)は、電話と手紙と留守番電話の産出過程に注目して、「メッセージ」が談話型(discourse type)として電話会話と手紙との言語的特徴を併せもっていることを指摘している。Hopper(1992)は、知人と他人の「メッセージ」の違いを比較し、第一発話や名乗り、最後の言葉に親しさの違いが反映していることを報告している。そこで、これらの研究を参考に、まず、留守番電話の場面的独自性を手紙と電話との比較の上で抽出したい。

3. 留守番電話の場面的特性

パソコン通信を含む新しいメディアの特性を整理している川浦(1993)、稲葉(1993)の研究とDingwall(前掲)を参考にし、留守番電話と電話会話と手紙との場面的特性を以下のようにまとめてみた。

表1 留守番電話と電話と手紙の場面性比較

	留守番電話	電話	手紙
1. 情報の流れ	一方向	双方向	一方向
2. 伝達の対象	1対1または1対多	1対1	1対1
3. チャンネル	口頭/音声	口頭/音声	文字
4. 伝達形態	間接	直接	間接
5. 時間的制約	有り	なし	なし
6. 状況依存性	小さい	大きい	小さい
7. 準備	できない(準備も可)	できない	できる
8. モニター	できない	相手のフィードバックによってできる	できる

9. 保存性/記録性	永続性	消滅性	永続性
10. 応答のタイミング	遅れる	瞬時	遅れる
11. 談話型	未発達	一定の型有り	一定の型有り

表1の下線を示した箇所を見ると、留守番電話が、手紙と電話の双方の場面性を分けもちつつも、手紙との共通点が多いことがわかる。電話と手紙に共通しているが、留守番電話だけが異なる場面性を表1からあげてみると 1)時間的制約がある(表1の5)こと、2)モニターできない(表1の8)こと、3)決まった談話型がまだ定着していない(表1の11)ことがあげられる。これを更に詳しく見てみると、電話では、話された言葉は統語的に逸脱があったり、言い直しなどであっても、産出過程(process)において次々と消えてしまうため産出結果(product)の完成度は求められない。一方手紙は産出結果(product)は永続性があり高い完成度が求められるが、何度書きなおしてもかまわないし、その推敲過程(process)は読者の目には触れない。「メッセージ」は相互行為のない間接的伝達であるが(表1の1、4)、産出結果には永続性がある(表1の9)。そのために完成度の高い産出結果が求められるにもかかわらず、時間的制約があり、産出過程での言い直しなどは、すべて聞き手に伝達され、かけ手はそれを消すことも聞き直すこともできない。³⁾ しかも、通常は、準備もできない(表1の7)。つまり、「メッセージ」は、産出結果(product)にも、産出過程(process)にも配慮しなければならない厄介な言語行動なのであり、決まった談話型もまだないので、これらが苦手意識を起こさせる要因なのだろう。このように「メッセージ」は電話と手紙との場面性が混在し絡み合った独自の場面性を持っているといえる。そこで、この独自性が実際の「メッセージ」にどのように反映しているのかを見ていくことにする。

4. データ

1990年1月～1993年5月の間に自宅の留守番電話に残された「メッセージ」の中から親しい友人からの61の「メッセージ」を分析した。分析に際して「メッセージ」の話し手全員に承諾を得ることはできなかったが、例として紹介する「メッセージ」に関しては事後承諾という形で許可を得、話し手が特定される可能性のある固有名詞などはすべて記号やアルファベットで表した。

5. 分析

5.1. 全体構造

英語の留守番電話と同じように、日本語の「メッセージ」も、一方的に内容だけを話すのではなく、通常の電話会話の談話に近い談話構造をもっていることがわかった。そこでそれらを、内容によって3つに分ける。⁴⁾ まず、内容に入るまでの挨拶交換などを「開始部」、内容の前置きからしめくくりや、別れの挨拶を言うまでを「主要部」、しめくくりや別れの挨拶を述べる部分を「終結部」とする。かけ手が「メッセージ」を話し始めるまでの流れも含め以下のように整理した。

<例1>

(1)メッセージが話されるまで

- C. 電話のベル …… 0. 呼び出し
R. つながった音 …… 1. 応答可能のサイン
R. 「はい たいま留守しております…」 …… 2. 留守番電話による応答

(2)メッセージ

- <例1>C. 1. もしもし- ……「開始部」 1. 電話会話枠組み作り⁵⁾
2. あの () ▲▲△△です …… 2. 自己提示
3. えっなんですけども、×月の×日の土曜日、もし あの おひまでしたら…「主要部」1. 内容前置き
4. あの Yのコンサートに行きませんか () …… 2. 中心内容
5. あの また 電話しまーす …… 3. 次の接触方法
6. そいじゃ 失礼しまーす ……「終結部」 別れのあいさつ

C: かけ手 R: 受け手 ▲▲: かけ手の姓 △△: かけ手の名またはニックネーム アルファベット: かけと手受け手以外の人名
(): ポーズ 「-」: 母音の伸び

このような構造をもった「メッセージ」に、先に述べた場面的特性が実際にどのように反映しているのかを、産出結果としての言語形態に現れる特徴と、産出過程での音声部分に現れる特徴とに分けて検討したい。

5.2. 言語形態に現れる特徴

5.2.1. 漢語の使用

- <例2>1. もしもし …… 開始部 1. 電話会話枠組み作り
2. えー ▲▲です() え [N=所属]の▲▲です() …… 2. 自己提示

3. あ えー 実は あの日曜日の件なんですけれども主要部 1. 内容前置き
4. やっぱり手土産なんかーやっぱり用意するのかなー{笑い} どうするのかなー() あの あと お金の方ですね どうするのかなー
と思ひまして えー 一応ご相談にと思ひまして え お電話いたしました()主要部2 中心内容
5. 本日まだ家の方におります{笑い}ので よろしかったらお電話お願いします主要部3. 将来の接触方法

まず、電話会話なら「～のこと」となるところを「～の件」、「きょう」というところを「本日」といった言葉が使用されている。「近いうちに」を「近日中に」(齋く3>)「あした」や「あさって」が「明日(みょうりち)」「明後日」とされるなどの語彙が使われているものもいくつかあった。漢語や圧縮した表現は話された言葉を文字化した場合に現れ、また、同音異義語が多いことから通常音声伝達では避けられる傾向にある(半澤 1990)。また、日常会話での出現度は少なく、音声伝達でもニュースの言葉の特徴である(井口 1977)。それがなぜ「メッセージ」では多く現れるのだろうか。「メッセージ」は、音声伝達でありながら、先に示したように、時間的制約があるという場面的独自性をもっている(表1の5)。そのため、用件だけをまとめて話さなければならない。荻野(1994)と向後(前掲)は、「メッセージ」のみの場面的特性である「時間制限」が、かけ手に緊張感を与え、かなりの心理的圧迫になっていることをかけ手に対する意識調査から報告している。産出過程においては、時間制限のもとで、緊張して話す状況というのは、スピーチなどのフォーマルな場面におかれる場合に近い。そのため、ニュースのように話された言葉を文字化した時のようなフォーマルな場面での表現が現れると考えられる。また、荻野(1991)は、限られた時間内に重要なことから話そうとするため、「新聞記事的な」話し方になるとしている。「メッセージ」は、完成度が高くまとまりのある産出結果を作ることが要求されている。漢語は、文章において一文を短く整えた形にすることができ(半澤(前掲))、結果的に産出結果に対する場面的要求にも応えることになる。更に、産出結果の永久性(表1の9)という場面的特性によって、聞き手は何度も聞くことができるため、同音異義語が多くてもそのマイナス面も捨象される。そのため本来音声伝達にはなじまないこのような言語形態が現れると考えられる。

5.2.2. 伝達内容を整えるためのメタ言語表現が多い

例2では「一応ご欄にと思ひまして お電話いたしました」というようなメタ言語表現が見られる。このような言語や言語行動について言及する表現は、杉戸(1989)、杉戸、塚田(1

991)で詳しく考察されている。以下のような例があった。

<例3> : 「～の件で返事申し上げたいと思います」 「～のおかげのお電話です」 「～からのご伝言です」

これらの表現は「メッセージ」の内容がどんなものを説明するもので、杉戸(1989)はこの種のメタ言語表現を「伝達内容を整える機能をもつ」としている。そしてこのようなメタ言語表現は、素材としての事実や考えを表現と伝達の中心的な関心事としている文章に現れやすいとしている。「メッセージ」は、間接伝達であり、産出過程での状況に依存できない(表1の6)。「メッセージ」に時間や場所を入れたり、手紙のように、発信日を入れたりしているものがあることは、発話時の状況を時間的に共有できる電話会話との違いを示している。このような言語行動に言及する表現は、伝言ダイヤルに残された会話の特徴でもあることが吉見他(1992)でも、報告されている。⁶⁾ 伝言ダイヤルも、かけ手は、受話器に向かって一人で伝言をふき込み、後で受け手がそれを聞くという伝達行動であり、「メッセージ」産出と近い言語行動である。⁷⁾ 産出過程においての状況は共有できないため、発話時の状況を言葉によって作り出さなければならぬのである。そのために、メタ言語表現を使うことで、聞き手に明確に内容が伝わるように、伝達内容を整えていると考えられる。つまり、メタ言語表現は、「メッセージ」のもつ発話時の状況依存性の小ささを反映した言語形態による対処であると言える。

5.2.3. 丁寧体の使用

通常の親しい間柄での対話では、いわゆる丁寧体はほとんど使われず、むしろ避けられており、終助詞で終わるものが圧倒的に多い(メイナード 1993)。しかし、「メッセージ」では、1人の親しい間柄の相手に対して話すにもかかわらず、丁寧体や尊敬語、謙譲語などの使用頻度が高い。まだ数量的に処理していないが、筆者が大学生に行ったアンケート調査⁸⁾でも、通常より丁寧に話すと言った大学生が多かったことから、「メッセージ」は、通常より丁寧度の高い表現が使われる傾向があるようだ。また、なぜ丁寧体などを使ったり、より丁寧に話すのか、口頭で何人かに聞いてみたところ、「誰が聞くがわからない」(特に相手が一人暮らしではない場合)こと(表1の2に対応)や、「録音されて残る」こと(表1の9に対応)から、誰から聞かれてもおかしくないように、きちんと整った形にし

ように考えるからという答えが多かった。荻野(1991)でも、「メッセージ」を誰が聞くかわからないという不安があることが、話しにくさを感じる原因の一つであるととらえている。手紙なら、封がしてあるため、目指した相手以外が勝手に読むということはないが、「メッセージ」はそうではなく、不特定多数の聞き手が想定できるということである。丁寧体は、音声伝達においては、ニュースや講演のような話者交代のない不特定多数に対して使われるものである(半澤 前掲)。

これらから、丁寧体を使うことも、3. で示したような、場面的特性に対処しつつ、完成度の高い産出結果を作りだすために現れる言語形態であると言えそうである。電話会話の特徴である言いさしの出現率が低いことも、整った産出結果を作るという場面的要請に応えるための対処であると言えるだろう。ただ、相手が機械なので、親しげな話し方がしにくいという意見もあったことから、丁寧に話しているのではなく、感情的へだたり(detachment)⁹⁾をマークするための言語形態であるとも言える。このことは、いわゆる丁寧体が、日本語においてどのような機能を果たしているのかを知る上で重要である。更に、アメリカの学生に対して行ったアンケート調査¹⁰⁾やアメリカ人に直接聞いたことによると、留守番電話では、相手が機械なのだから丁寧に話す必要はなく、通常の電話よりも丁寧度の低い表現を使うということであった。このことは、日本人とアメリカ人の丁寧度のとらえかたの違いや、機械とのインターアクションと人と人とのインターアクションをどのようにとらえているのかを知る上で興味深い。丁寧体については、多くの要素が絡み合っていると考えられ、更に綿密な検討が必要であると思う。

5.3. 音声面に現れた特徴

5.3.1. 相互行為を想定したポーズ

産出過程では、直接の伝達相手はいないのだが、かけ手が対話を想定して話していると考えられる特徴がいくつか見られる。まず、挨拶や誘い、依頼、疑問文の後にポーズが頻繁に置かれている(例1、例3<3><4>)。また、終助詞「ね」の後にもポーズが置かれており(例2<2><5>)、対話の際の隣接ペアの第2発話部のスペースをあけているかのようなようである。向後(前掲)は、日本語の電話会話においてあいづちはスムーズな話の進行に不可欠であるのに、それなしの「ひとり語り」を機械の音(受け手の応答メッセージ)によって強いられるため「メッセージ」を残しにくいとしている。また、情報だけを伝えるために電話をかけるのではなく、触

れ合いを求めた「情緒」の伝達が目的でかけられる電話が多くなりつつあることを指摘し、それが合理的事務的な留守番電話にそぐわないのだろうと考えている。Gold(前掲)も、終結の挨拶の部分であたかも相手がいるかのような音調やポーズを置いて話されているものがあることを指摘しており、「実際には相手がないのに相手がいると想定して話すように強いられる」「メッセージ」を入れるというタスクをこなす工夫の1つだとしている。一方方向(表1の1)の伝達行為という「メッセージ」の場面的特性に音声伝達の特性を生かして対処していることの現れだと考えられる。

5.3.2. 母音を延ばす

例や資料を見ると、「あー」や「えー」など、考えている時間の沈黙を補うもの以外にも、しばしば母音を伸ばして発音されているものが多い。

開始部の「もしもしー」(例1)、あいさつの「こんばんばー」(資料3)、自己提示の「△△ですけどー」(資料<2>)、「△△でーす」(資料<3>)というように現れ、その後にはポーズが入ることが多い。通常の電話会話でもこのように話す場合も多く、5.3.1.と同じように相手を想定して話しているかのようなようである。このことは、相手が出てきてくれないかと待っているかのようなようでもある。また、挨拶から自己提示へ、自己提示から主要部へという談話構造の移行位置に現れている事は、相手がないことを確かめた後は、フィードバックがないため「モニターできない」(表1の8)という場面的特性によって自ら談話の進行過程をモニターしなければならず、談話管理上の標識として機能していると考えられる。

また、終結部にも多く見られ(例1 資料<2><3>)、これも相手の応答部分の間をとっているようである。ただ、真面目な内容のメッセージや、今回は分析の対象にしていない親しくない人からのもの場合には、ほとんど現れていない。佐竹(1995)がパソコン通信の文体を「新言文一致体」と名づけているが、この文体の特徴の1つにここで言う母音を延ばす「長音符号」の表記をあげている。これは、「仲間に向かってまるで話しかけるように思いつくままに書く」ために、書き言葉では一般的でない表記が現れるのだとしている。このことから考えると、仲間うちの間での特徴だと考えられ、実際は無味乾燥な機械相手のひとり語りだが、感情的かかわり(involvement)を表出し、音声によって情報だけでなく、親しい相手に「情緒」も伝えようとしているのだと考えられる。先に示したように、終助詞のない丁寧体が多く使われているが、これが不特定多数の人に聞かれる可能

性のある場面的特性に対処した言語形態であっても、親しい間柄ではよそよそしい感じで、感情的分離(detachment)を引き起こすことになってしまう。その点から考えて、ここでの長音化の機能は、産出結果を整えるための言語形態によってできてしまった感情的なへだたりを、音声によって緩和していると考えられる。電話会話では、親しい間柄でも終結部では丁寧度が上がるのに対して、留守番電話では丁寧度において逆の現象が見られる(概ね 齋1,5,6)ことは以前に指摘した(岡本1991)。その場合と同じように音声伝達の特性を生かして、「へだたり」を緩和し、人間関係を維持し、調整するために機能しているのである。

6. 結論

留守番電話は手紙と電話の双方の場面的特性を分け持っており、かけ手にとって消滅性のある音声伝達であるにもかかわらず、短い時間内に文字伝達に要求される完成度の高い産出結果(product)を作りださなければならない。そのため、音声にはなじまない漢語や、メタ言語表現が使用され、2人の親しい間柄にはそぐわない丁寧体が使用されることになる。その結果できてしまったお互いの「感情的なへだたり」を、相手の応答部分が想定される位置にポーズを入れたり母音を延ばして、直接相手と対話しているかのように話すことによって「感情的かかわり」を示し、緩和調整しているといえる。つまり、場面的要請によって産みだされた産出結果(product)の言語形態が、親しい間柄にとっては、へだたりを作る恐れがあるので、それを「メッセージ」の産出過程での音声伝達を通して調整しているということである。これが「メッセージ」の言語的独自性を与えていると考えられる。つまり、それぞれ個々の場面的特性が互いに相互作用し補完し合って、その場の要請に応じた言語的独自性を産み出すと言える。このように、これまで書き言葉、話し言葉として分けられていたものが場面的要請によって組合わさって現れ、相補完しながらそれぞれの場での言語的特性を産み出していくと考えることができる。茂呂(1995)は、書き言葉と話し言葉は単純に分けられず、人々が実際に使用しているのは、書き言葉と話し言葉の2つのモードが絡み合った中間モードだといえるのではないかとし、2つのモードの間にある多様なインターフェイスを記述していくことの重要性を指摘している。Tannen(1982)は、書き言葉の特徴と話し言葉の特徴は、明確に分けられるものではなく、それぞれのジャンルにおいてどちらの特徴がより濃く出ているかというような、1つの軸の上での連続体としてとらえている。Biber(1988)も、23種

類のジャンルの言葉を比較することで、Tannenと同じように書き言葉と話し言葉の関係をとらえている。多様な機能を装備した電話や、パソコン通信をはじめとする新しいメディアを介したコミュニケーションの機会が増えて来ること、コミュニケーションを成立させている要素が益々複雑化して来ただろう。話し言葉と書き言葉の区別をいかに教えるかということは、常に日本語教師を悩ます問題である。日本語においても多様なジャンルの言葉の実態を地道に分析し、書き言葉の特徴と話し言葉の特徴とされてきたものが、どのように共存しあっているのかを見、どんな要素がそれぞれの特徴を導き出すのかを調べていく必要があると思う。それによって、日本語の話し言葉と書き言葉が、どのように連続体を成しているのかを明らかにしていくことによって、はじめて場面に応じた自然な話し言葉と書き言葉の教育ができるのではないかと考える。今回は電話会話との言語的形態の違いが最も現れる友人だけの「メッセージ」に絞った。日本語母語話者と留学生、知り合いと他人(セールス電話のような)や、日本語と英語の「メッセージ」には、「あの」や「えっと」などの談話標識の有無や、「メッセージ」の全体構造などの点で、興味深い相違点が数多く見られる。また、留学生と子供の共通点も観察されている。今回は紙幅の関係で取り上げなかったが、「メッセージ」には、準備のない(unplanned)スピーチ(Ochs 1979)との共通点も現れている。スピーチや、メモとの相違点や共通点なども今後続けて調べていきたい。更に内容や目的の違いによっては「留守番電話の方がらく」という場合もあるようで(荻野 1994)、これらの点については稿を改めて報告したい。

注

- 1) 向後(1993)の、大学生・短大生・専門学校生93名に対する調査によると「苦手」「やや苦手」を併せると約6割になることが報告されている。
- 2) 柴田(1992)は受け手の方の応答メッセージの分析を行っている。また、岡本(1991)は、留守番電話と電話の終結部分の丁寧さの違いの小規模な比較分析を行っている。
- 3) かけ手優位であった電話でのコミュニケーションが留守番電話では受け手優位になったことがこれまで指摘されている (Dubin 1987 岡本 1991 Hopper 1992 荻野 1994)。
- 4) Gold(前掲)では、「始めの挨拶」(greeting)、「主要部」(body)、「終結」(closing)、「追伸」(postscript)の4つに分けていたが、今回の分析では内容的に「追伸」に

近いものは1つしかなかったなのでそれは「終結」に入れた。

5)電話会話では「もしもし」は呼び出しとして機能するが、応答メッセージを聞いたあとなのでここでは呼び出しとは考えにくい。かけ手が電話会話の枠組みを使って話しはじめていると考えこのようにした。

6)吉見他(1992)によると、伝言ダイヤルのほとんどが、冒頭に正確な時刻を述べていることや、ここで言うような、言語行動に言及する「ということをお伝えしといて・・・」のような、発話のコンテキストを発話内容において構成する間接話法的伝言口調が頻出することを明らかにしている。

7)伝言ダイヤルとは、NTTが1986年に始めたサービスで、あらかじめ決めておいた暗証番号を押して特定の伝言スペースに待ち合わせ場所や用件などを録音し、それを、別の人が都合のいい時に、そのスペースにアクセスして、内容が聞けるようになっているもの。暗証番号を知っている者は、だれでもアクセスして残された伝言を聞くことができる。

8)1993年に東京国際大学の学生に対して「留守番電話に対する調査」を行った。

9)Chafe(1982)は、英語の書き言葉と話し言葉の違いを“detachment”と“involvement”という観点から区別している。Tannen(1989)は書き言葉にも感情的なかわりの要素があることを指摘している。

10)1992年にアメリカのミズーリ州のワシントン大学で、8)と同じ調査を行った。

《資料》：「メッセージ」スクリプト

<1> 1. えと、もしもし△△ですけど() えーっと 〇〇ちゃんへ() 2. あしたー引っ越しをします それから 電話番号はー 2、3日 えーとー() ん() あの もう少ししてから わかります で あの 電話がつうじたら あの また 電話します 手紙でも書いてください() 3. じゃあね バイバイ

<2> 1. あー、もしもし、〇〇? △△ですけどー() 2. あのー もう5じー40分の新幹線に乗って帰るから、またこんどー あのー、帰ってくる時電話ちょうだいね() 3. じゃあねー バイバイ Hくんよろしく

<3> 1. あー、〇〇さん こんばんはー() えー △△でーす 2. えっと またー 近日中に電話しますがー もしー ひまな時があったら ちょっとお電話ください 3. すいませーん

<4> 1. もしもし ▲▲ですけども 元気にはしてますか?() 2. えーっとー 今月の〇日と〇日のあの☆☆シンポジウムの件でお話ししたんですけども えー ちょっとお願いもあるので またー 夜にお電話します 3. じゃまた

<5> 1. もしもし △△ですけども() 2. 〇〇は今いないみたいですね() じゃ またいつか電話します 3. じゃあね

<6> 1. あ △△です() 2. えっとー()ともだち 〇〇のー えーっと友達の あのー 交通事故のことで ちょっとお話ししたいと思ってお電話しました じゃ また 電話します 3. じゃあね

1. 開始部 2. 主要部 3. 終結部 ●●:受け手の姓 ○○:受け手の名またはニックネーム ▲▲:かけ手の姓 △△:かけ手の名またはニックネーム ◎:数字 ☆☆名称など アルファベット:かけと手受け手以外の人名 ():ポーズ ?:上昇イントネーション 「-」:母音の伸び

参考文献

- (1)Biber, Douglas(1988) Variation across speech and writing, Cambridge Cambridge University Press.
- (2)Chafe, Wallace L.(1982) "Integration and involvement in speaking, writing, and oral literature." Spoken and Written Language: Exploring Orality and Literacy, ed. by D. Tannen, Norwood, N. J. : Ablex. pp. 35-54
- (3)Dingwall, Silvia.(1992) " Leaving telephone answering machine messages: Who's afraid of speaking to machines?" Text12(1), The Haque pp. 81-101
- (4)Dubin, Fraida. (1987) "Answering Machines." English Today, No. 10 Cambridge Univ. Press pp. 28-30
- (5)Gold, Ruby. (1991) " Answering machine Talk." Discourse Process, 14 pp. 243-260
- (6)半澤 幹一(1990)「文章と談話のあいだ」寺村秀夫他編『ケーススタディ 日本語の文章・談話』 桜楓社 pp. 106-117.
- (7)Hopper, R. (1992) Telephone Conversation Indiana Univ. Press
- (8)井口虎一郎(1977)『話しことば書きことば』日本語講座5 大修館書店
- (9)稲葉哲郎 (1993)「パーソナルメディアの変容」『現代のエスプリ』No. 306 3月号 至文堂 pp. 20-28
- (10)川浦康至(1993)「メディアコミュニケーション」『現代のエスプリ』No. 306 3月号 至文堂 pp. 9-19
- (11)向後千春(1993)「留守番電話はなぜかけにくいのか」『現代のエスプリ』No. 306 3月号 至文堂 pp. 102-109
- (12)メナード・泉子・K. (1993)『会話分析』くろしお出版
- (13)茂呂雄二 (1995)「書きことば」と「話しことば」のインターフェイス」『月刊言語』2月号 Vol. 24. 大修館書店 pp. 28-34
- (14)Ochs, Elinor (1979) "Planned and unplanned discourse." Discourse

- and syntax, ed. by Talmy Givon, N. Y. Academic Press pp. 51-80
- (15) 荻野綱男 (1991)「情報化と言語変容」『日本語学』Vol. 10 4月号 明治書院 pp. 63-69
- (16) 荻野綱男 (1993)「電話の現在」『日本語論』No. 2. 12月号 pp. 50-56
- (17) 荻野綱男 (1994)「情報化と言語行動変容」平成5年度文部省科学研究費重点領域研究「情報化社会と人間」第2群高度情報化社会における人間行動の変化平成5年度合同成果報告書、重点領域研究第2群事務局・総括班 pp. 171-198
- (18) 岡本能里子(1990)「電話における会話終結の研究」『日本語教育』72号 日本語教育学会 pp. 145-159
- (19) 岡本能里子(1991)「電話会話における対人関係維持としての言語使用」ディスコースプロ研究会編『ディスコースプロセス研究』第3巻第2号 pp. 51-60
- (20) 佐竹秀雄 (1995)「新たな文体を模索する」『月刊 言語』2月号 Vol. 24. 大修館書店 pp. 52-59
- (21) 柴田武 (1992)「留守番電話という相手」『日本語学』Vol. 11 9月号 明治書院 pp. 82-88(90)
- (22) 杉戸清樹(1989)「言語行動についてのきまりことば」『日本語学』Vol. 8 明治書院 2月号 pp. 4-14
- (23) 杉戸清樹・塚田実知代(1991)「言語行動を説明する言語表現-専門的文章の場合-」国立国語研究所報告 103 研究報告集(12) pp. 131-164
- (24) Tannen, Deborah. (1982) "The Oral/Literate Continuum in Discourse" Spoken and Written Language: Exploring Orality and Literacy , ed. by D. Tannen, ALEX Publishing Corporation. pp. 1-16
- (25) Tannen, Deborah. (1989) Talking voices Cambridge, Cambridge University Press.
- (26) 吉見俊哉・若林幹夫・水越伸 (1992)『メディアとしての電話』弘文堂

(東京国際大学)